

花見

有村尚一

一

病院の外に出ると、思いもかけず夜の闇が深くなっていった。背後で扉が閉まり、逃げるように光が収縮すると深い闇色が身体を包んだ。眩しいほど明るく輝いていた日中の天空の記憶が闇の中に吸い込まれると、この病院に来てからの数時間の隔たりが常ならない夢の中にいたような気がした。

「ちよつと相談があるのだが」

高木達郎は、隣の姉の利枝子の顔を覗き込んだ。

「今回は、どうも難しいようね」

利枝子は、返事の代わりに、病人の後見役であり、今までにもいろいろ苦勞を抱え込んできたはずの弟の顔を覗きこんだ。

「うん。それで、頭の痛いことがあるんだよ」

達郎はそう言ったが、浮かない顔をちらと姉に向けただけで、用件を切り出さなかった。

この一週間、高木は毎日会社の帰りに、一時間ほどの余計な時間をかけて病院に通い詰めていた。都会のはずれの緑に囲まれた一軒家に住んでいて、ほとんど遠出をすることのない主婦の利枝子が、電車で一時間半もかかるところを慌てるように飛んできたのも、達郎が連絡したからである。もつと遠地に住んでいる長姉の富美子は、明日来ることになっていた。

入院している父は、せいぜいあと三四日、と医者は明言している。利枝子は、弟の頭の中が分かったと思った。老人のその日、が正確に分からないというのは、サラリーマンである達郎の一番の悩みであるし、その後につづいて起こる騒擾にも似た行事と、それに付随して発生する費用のことを考えると混沌としてくる。しかし、老年のことでもあり、葬儀も簡略にすればたいした掛かりにもならないはずであるし、決して吝嗇でもない達郎がこの期に及んで、何でそんなことで悩んでいるのか、と不思議な思いがした。

「何とかなるわよ」

利枝子はそう言ったが、病床にある父に金は残っていないことは分かっていた。七十五歳になつて都会のマンションを引き払って、都心から少し離れた利枝子とは逆方向の田園の中に借家住まいをしてから、もう十五年が経っている。数年前、後妻に先立たれた時に姉弟三人が急ぎ集まり顔を寄せ合つて家の中を引っ掻き回したから、父の所帯のことは洗いざらい分かっている、確かに父の金は当てにすることが出来ない。

商店街の照明が、一段と明るさを増していた。パチンコ屋の賑やかすぎる騒音が、通りに溢

れていた。ドラッグストア、本屋、弁当屋、コンビニがあった。

利枝子が、弟は何処を探しているのだろうかと考えた時、達郎は相変わらず思案顔のまま、目の先の蕎麦屋を顎で示した。

「ここにしよう。あまり時間は取らないから」

紺ののれんが、昼食のあと何も口にできなかった空腹を、急に思い出させた。病室は一人部屋だから他人を気遣うこともなく長居をすることは出来た。しかし、横になっただけでぴくりとも動かない病人の傍にいと、何をやる気も起こらず、ただ顔を眺めて黙って座っているだけである。時折り玄関ホールに下りてきて手脚を延ばしたが、その折りに喉を潤しただけで、食べ物は一つも口にしていなかった。

蕎麦を注文して、改めて顔を見合わせると、利枝子が話を促した。

「これからが大変ね」

「そう、なかなか大変なんだ」

「考えることが一杯あるね」

「うん、一杯ある」

が、何時もはきびきびと事務的に事を進めるはずの弟は、それでも用件を切り出さないうで、何を思案しているのか黙っていた。

九十歳の老人は重篤であった。つれ合いを数年前に亡くした後の独居の生活には、特に不安はなかった。杖を突くこともなかった。時折、目の前の、今は誰も手入れする者のいない小さな庭に下りて、季節ごとに彩る赤や黄や紫の花を眺める楽しみを欠かさなかった。食事は近くの施設から提供を受けていて不便はなかった。が二週間ほど前、寄る年波で体調を崩したと連絡があった時、達郎は慌てるように老人を訪問して、医師と打合せをし、すぐに入院を決めた。それ以後、毎日のように病院を訪問して老人を観察し、不安と希望を持ち、万が一の覚悟もしていたから、経済的な負担や、その後の仏事の処置などは今更苦にもならない。

達郎の悩みは、金のことで葬儀のことでもなかった。実に悪い時にぶつかってしまった。明後日、京都での観桜会に出かけなければならない。達郎は今この時でも、何とかして桜を観に行くことを考えていた。

「忙しくなるわね」

「うん、忙しくなる」

達郎は、利枝子の考えていることとは、全く別の日程を計算していた。

旅行は一泊二日である。この三、四年、定年後のことが脳裏を掠めることが多くなってきたせいか、大学時代の友人が、年に一、二度集まる会も人数を増やしていた。今年には京都の観桜会にしようと提案したのは達郎で、何時もは食事会の後でカラオケなどに流れるのを、費用もほんの少し増える程度だし、膝を突き合わせてゆっくり話も出来ると簡単に決まって、旅行社との交渉をし、宿の良いところに決めたのは二ヶ月ほど前である。老人が入院した時には、又すぐに退院するのだろうかと全く危惧することもなく悠長に構えていたが、その後の老人の展開は、達郎の思惑を越えていた。

実際にかち合うのであれば、参加を諦めなければならない。しかし、今日明日という病人の状態を目前にしながらも、欠席することを一度も考えなかったのは、達郎が幹事役であるとい

うことも理由には違いないが、達郎自身がどうしても桜を見に行きたいと思っていたからである。

希望が叶うのなら、達郎が旅行する二日間父が生き延びることである。昏睡状態で呼吸器の助けを借りている病人が、そんな自在なことが出来るはずもなかった。が、希望的な願立を排除しても、達郎には病人に変化が起これば、どうしても思えなかった。だから、京都に行くことに何の疑念もない。問題は、姉に断って行くか、黙って行くかだけのことだが、それが今、姉を前にしても結論を出せないでいた。

京都に行く日は、明後日に迫っている。日中、病人の顔を見ていると、姉は弟の浮かない顔に、父を案じている姿勢を感じているらしかった。姉に相談すれば、駄目だと言われることは間違いない。誰しもがそう考えるし、姉もそう考えるだろう。それなら仕事にかこつけた方が良くかもしれない。

六十歳の姉は、今まで、達郎に一度も反対したことがない。弟だから、それに男が一人だからということもあった。達郎が仕事熱心であるということも信頼を勝ち得ている理由であった。主婦である利枝子にとっても、勤めは生活を守る基盤であるし、会社では親が入院している程度のことは理由にもならないことは理解している。京都の案件は達郎が重要な役割を担っていて、日程は動かすことが出来ない、代役を立てることも不可能なのだという理由も、作り上げるのは簡単である。しかし、それは嘘をつくことであつた。利枝子に嘘をつくのは方便だが、すでに深い眠りの入口にいる病人であっても、いや、それだからこそ、嘘をつくことは心が落着かなかつた。

「どうするの?」

利枝子の問いに、達郎は咄嗟に、姉に伝えてから行くことを選んだ。

「俺、明後日、京都に行かなければならないだよ」

蕎麦を箸で持ち上げながら、達郎は話を切り出した。

「仕事?」

うん、と達郎の喉は返事をするところであつた。が、いや、と喉は言った。やはり不味かつたかなと思つたのは後のことで、姉の顔に不安の影が横切り、何かを探るように目が沈んだからだ。うん、と肯定しても同じだったかもしれない。達郎は出来るだけ顔を柔和にして、しかし覚悟を決めてはつきりと言つた。

「いや、そうじゃない。何時も集まっている大学時代の友人八名とね」

「遊び?」

「うん。桜を見にね」

「おやまあ。結構なこと」

達郎の口元が緩んだのを、利枝子は目を細めて微笑んだ。が、すぐに、

「でも悪い時にぶつかつたわねえ。明後日からじゃ、下手をするとかち合うわね」

利枝子は真顔になつた。どうするのと言うより、当然のことだが、それは断るのでしょうと目は訊いていた。

「うん。しかし、俺はそうならないと思つているんだよ」

達郎は相談を持ちかけるように言つた

「と言うと？」

「親父は簡単におさらばしないってことさ」

「そうだろうか」

利枝子は一瞬、ぎよつとして、今度ははつきりと、懐疑の目を達郎に向けた。

先ほど目にした病人は、眠りに落ちたまま平穩を保っていた。薬効で明日は今日の続きで急変することはないだろうが、明後日は分らない。これは病室から玄関ホールに来るまで、二人が廊下を歩きながら確認しあつたことである。その異変が起こるかもしれない一番危険な明後日に、喪主になる達郎が旅行に行くというのである。利枝子は弟の浮かない顔の理由が、今度こそ分かつたと言う顔をした。

「翌日には帰ってくるから」

「お前、行くつもりなの？」

利枝子は目を大きく見開いた。

「うん。行くこうと思つている」

明確で断定的な言い方に、姉はその時初めて、弟の真意を理解した。

「冗談じゃない。止めなさいよ。旅行中にお父さんが大変になつたらどうするの」

利枝子は怒りで頬を紅潮させて、ぱつちりとした目を一層大きくして睨んだ。

「そうならないよ」

達郎は静かに、しかし断言するように言った。

「なるならないの問題じゃないでしょう。心構えの問題よ。こういう時は旅行を中止するのが当り前でしょう」

「それは分かっているよ。だけど親父は逝かないよ。その間に俺の用事を済ませようと思つているのさ。親父が頑張つている間は、俺も目一杯頑張るのさ」

「仕事じゃないのでしょうか。花見なんか何時でも出来るわよ」

「しかし、友人達と会うのも年に一回、二年に一回なんだよ。遊びも仕事も同じなんだよ」

「何が同じなのよ。理屈を言つて」

利枝子は首を横に振つた。優しそうに和んでいた二つの眼は、今は不徳者を咎める冷ややかな目つきに変わつていた。

やはり利枝子には、仕事と言つた方が良かったかな、と達郎は後悔した。が、それはもう後の祭りである。

「どうして心配ないと思ふの？」

利枝子は、姉の権威も前面に押し出して、身体を前のめりにして睨んだ。桜見物と親の臨終との秤が、どんな基準の糸でなら吊り合うのか。

「そうだなあ。俺の勘だな。さつき親父の顔を見ていたが、行つて来い、死なないで待つているからと言う顔をしていたよ」

「馬鹿言いなさい。お前が行きたいだけでしよう。病人が口を開くはずがないじゃないの」

利枝子はそう言うともう呆れてものが言えないという風に、口をぽかんと開けて黙つた。

病人の顔は土気色をしてなめし皮のように乾いていた。耳を口元に近づけても、ほんの微細な呼吸さえも感じとることが出来なかつた。胸を覆っていた薄い掛け布は、目を凝らしていても、

全く動く気配をみせなかった。達郎は自分の欲求を優先させている。利枝子は達郎の身勝手さに目を鋭くして反意を示した。

しかし、まあまああの会社の部長で、毎日、時間に追いかけられている達郎には、この程度の錯綜した時間の網の目をかいくぐることは、日常茶飯のことである。今日も達郎は会社の仕事はきちんとこなして来た。夕方、数分でも早く病院に着くために、昼食時は移動の時間に当てて得意先三社を回ってきた。会社が理解を示すのは、達郎が喪主を勤める葬儀の時だけである。京都の旅行は土日で、しかも翌日には帰ってくるのだから、実際に問題になるのは、東京を離れる明後日の出発日だけである。緊急の事態にはとんぼ返りをする覚悟であれば、日常と相違しているのは、父親の一大事ということだけで、達郎にとっては綱渡りの範疇にも入らなかった。

「付き添いはどうするつもり？」

「うん、完全看護だから今日と同じだよ。京都に行く時は、連絡だけは取れるようにして置くけど」

達郎は、今はもう平気な顔をして蕎麦をついついている。

「酷いこと言ってる。私は反対だからね」

利枝子の顔は、今は怒りで真っ白になった。

「そうかあ、反対かあ」

「当たり前でしょう。はい、行つてらっしゃい、賛成ですと言う人が何処にいますか。それなら、私は今日はこれで帰りますよ」

もう勝手にしなさいと言う剣幕である。利枝子はおとなしい性格で、怒ったことは今まで見たこともない。達郎は、利枝子の怒りを鎮めるように柔らかく言った。

「うん、このまま少し長引くと思うから、また連絡することにするよ」

「でも、姉ちゃんは明日来ることになっているのは、どうするの？」

「明日は予定通り来てもらえばいいさ。どうせ一度は来て貰わなければならないのだから、三人で顔を合わせて相談しよう」

「だけど姉ちゃんは絶対に賛成しないよ」

「そうだろうなあ」

「姉ちゃんは、ぶんぶん怒るよ」

「そうかも知れないなあ」

八才年長の長姉は、実母が達郎を出産した際に産褥熱に罹患してそのまま亡くなったから、達郎のおしめの取替えをした。達郎には一番頭が上がない存在なのである。

長姉の富美子に、今電話をして、明日来るのは中止にするという考えはあった。しかしそれなら何時来れば良いのかと問われても困惑するだけである。これはもうそのままにすることに、利枝子は明日姉を駅に迎えに出ることだけは約束した。

し口を求めていた利枝子が、長姉の富美子を駅に迎えに行つて、顔を合わせた早々に耳に入れた。

利枝子は昨日の達郎とのやり取りを、細大漏らさず報告した。それに加えて、達郎は病人を見舞っている時は殊勝な顔をしているが、一旦離れたら、そんなことはすっかり放念して酒を飲んで騒いでいるくらいのは平気のようで、何時からこんなに冷酷な人間になつてしまつたのかと嘆いた。

長姉の富美子は、利枝子が予想していた通り、顔を真っ赤にして怒つた。病人のベッドに達郎がべつたりと付添ふ必要の如何はともかく、病人が重篤な状態の時に、頼りの後見役が当地を離れることの不安は、利枝子と同じであつた。

しかも、その理由が花見旅行で明日だと言うのだから、二度吃驚した。それほど安全なら、自分も今日ここに慌てて来ることもなかつたのである。遭難している船を横目にして、沈没することはないだろうと救助官が遊びにうつつを抜かしているようなもので、利枝子の驚天動地のような苛立ちも理解できた。

富美子は長姉の立場から、何時も何か事を相談する時は、最後の結論は、上から重石を置くように口を添えている。弟があと三年で還暦になる時代になつても、その習慣は変わつていなかった。

「とつちめてやらなくちゃ」
と富美子は言った。

しかし、達郎と顔を合わせ、三人一緒に病室を訪問した後では、利枝子の話を聞いて憤慨していたことへの対応に、少し余裕と変化が加わつていた。

確かに、達郎が不在にしている間、病人に変化が起こらなければ、今日と同じで問題はなかつた。付き添つていても、何事もなければ時間をもてあまして、かえつて身の置き所に困惑することは間違いない。

それに、万が一の後の多事多端を考えれば、鬼の居ぬ間の洗濯をさせてやるのも慰安というものである。富美子がそう考えたのは、二時間も電車に揺られてきて、ここでも長い間滞在出来るわけでもないし、それに今後も、全ては達郎に依存するという現実が妥協を必要とさせたからである。

「本当に心配ないのね」

病院から抜け出して、今度は、喫茶店を見つけて三人が落着いた時、富美子は、目の前の達郎を睨んで、確認するように言った。

「保障はないさ。俺の勘だよ。しかし俺のいない間、九十九パーセント変化はないだろうと思うよ」

達郎は二人を前にして悠々と、二人にはそう見えたが、しかも暢気そうに応えた。

「起こつた場合は？」

富美子は内心、達郎の態度に呆れながら、しかし追い詰めるように訊いた。実際、事が起こつたら、達郎がいなければうろろするだけである。

「いや、ないな。親父は俺を待つていてくれるよ。俺が旅行に行かなかつたら、逆に親父は自分の期限を決められないで困るだろうよ。これは俺が一番良く分かっている」

利枝子は、達郎の横着がまた始まったとでも言ったように、頬を膨らませて、長姉の脇腹を突付いた。

「それじゃ、まだ長く生きているといふこと？」

「いや、それは無理だ。今回は間違いなく駄目だよ」

「変な保証の仕方ねえ」

富美子が、頬をぶつと膨らまして呆れた顔をした。

「賭けね」

利枝子が達郎を睨んだ。

「いや、賭けではないよ。もつとずっと安心している。この二日間、親父に問題がないのなら、俺もその時間を目一杯使うつもりなんだよ。生きている奴は、忙しい世の中について行かなければ仕方がないのさ。親父もその位は知っているよ」

達郎はその時、花見を親父と一緒にするつもりだと言ふことを、あやうく口から洩らすところだった。この世の別れの宴を親父とするつもりだと言えば、一人は、京都に行きたいために、厚顔にも恥知らずの理由をつけているのだ、と達郎を狂人扱いしたに違いない。そうやってしまつては、今後の相談も先に進まなくなる。達郎は唇をへの字に曲げて言葉が口から飛び出るのを抑えた。その頑固な、そしてまたどこか暢気そうな姿が、二人に諦めの気持ちを起こさせたのかもしれない。

「まあ。達郎が考えることだから」

撤回することはなさそうだと踏んだ富美子が、幕引きをした。

勿論、富美子には、万が一の事態になつても、達郎に全て押し付けている便利さは計算に入つていた。どうせ遠地について、何度もこちらに向向してくる事は出来ない。それなら達郎に差配の全権を渡して置くことは都合が良かった。今までも実質上はそうなつていたのだから、今更、何も文句を言うことはなかった。ただ、実際にそれが起つた場合を考えると、堅実な達郎のとだと思ひながらも、やはり不安が生まれただけである。

しかし、その不安をもう一歩進めて、それでは達郎の旅行中、どんな椿事や面倒が起こるのかと頭を巡らして見ると、多少時間がずれるだけのことで、しかもその時間は、交通機関の進歩のおかげで半日の差に過ぎない。そんな程度の時間のずれは、人の死の場合には普通のこととさえある。万端準備を整えていても、多少のどたばたは常態なのだからと思うと、事は呆れるほど単純で明快に見えた。

富美子は、まるで憑き物が落ちたようにきれいに憂いがなくなった。そして、達郎もやはり還暦に近くなつてくれば、正確にものを判断できるようになつたのかも知れないと感心した。と同時に、父にはそれぐらいの事があつたとしても、父も驚かないだろうし、それが当然の報いであると思つたのは、その時、富美子の中に静かに沈殿していた父への積年の恨みが、これが最後だと思つたと、マグマが動くように身体の中をぐるりと動いたからである。

勿論、富美子は、そんなことは、ほんの少しも口にも顔にも出しはしなかった。それを想い出すのは、富美子にとつても決して楽しい話にはならなかったからである。

「急々の場合は、急いで何とかするのよ。やつぱりあんまりどたばたするのは嫌だからね」

利枝子は、姉の豹変にちよつと不満であつた。が、小さい頃から姉には絶対服従しているから、

しようがない、と言うように黙った。

三人は、そう結論を出す、今度は一転、和やかな仲良しの姉弟に戻った。そして、こうした機会でもなければ三人が顔をあわせる事はないのだし、前回は何時顔をあわせたのだろう、と頬を緩めて指を折ってみると、三年前、姉妹が亡母の墓参に行った後、三人で食事をした時以来である。その時、達郎は墓参に同行しなかったし、姉妹は父のところには寄らないで帰っている。

三人は暫く、その時の話に興じた。

その時、利枝子が母のことを思い出してか、それとも父の周辺をまた思い出してか、半分真面目な顔をして、

「お父さんは死んでもお母さんのところに行けないね」

と言った。これが長姉の抑えに抑えていた胸の底の感情を引き出してしまった。

「行けない、行けない。行けるはずがないじゃないの。行ってもお母さんは、来なくても良いと言って追い払うわよ」

富美子は半ば笑い、半ば今にも泣き出しそうな顔を見せながら、これは姉妹二人の共通した思いだとも言うように以心伝心の目配せをした。今度は達郎が、それに抗議するということも半分、姉たちを冷やかすつもりも半分で、軽い気持ちで言った。

「しかしまあ、親父は二人には本当に評判が良くないんだなあ」

その途端である。

「当たり前じゃない」

富美子が突然、今までの柔和な顔をかなぐり捨て、夜叉のような形相になって怒りの大声を達郎の頭上に落とした。

達郎は長姉の豹変に吃驚した。こんな長姉の顔を見たことがない。広い額の下に大きな優しい目を持ち、ふつくらとした頬が温和な表情を見せていて、その見かけの通りに穏やかな物腰で荒い言葉など、今まで一度も聞いたことがない。こんな怖い顔をどこに隠して持っていたのか。達郎は、ただ吃驚して声も上げられなかった。富美子は達郎をねめつけた。

「何を言っているの。お母さんの不幸と較べたら、お父さんの人生は、あまりにも幸福すぎて不公平よ」

穏やかな顔を一瞬に硬化させた富美子の、詰問するような厳しい口調に、利枝子が頷いて同調した。

「ええ、そうよ」

「それで良いじゃないか。幸福で何が悪い」

今三人が合意した直後の和やかな席だから、それに母が亡くなってから数十年も経っていることだから。そう、たかをくくった達郎が押し返すように言うと、

「それは達郎が何にも知らないからよ。何をとんでもないことを言っているの」

四つの目が、達郎を射た。いくら弟でもそれだけは許せない、いや、弟だから尚許せない、といった眼差しと気迫が、達郎を圧した。

「達郎、そんなことを考えているのなら、これが最後だと思つて言いますけどね。お父さんほど周囲に苦勞を振りまいて、それで自分だけは幸福に過ごした人はいないわ。今だつてお前に守ら

れているじゃない。お母さんはそんな人は一人もいなかったんだよ。お父さんがどんな苦勞をしたらつてお母さんの苦勞に較べると、とても比較になんかならないほど大変だったし、不幸だったと思う」

富美子の両の瞳にいきなり涙がにじんだ。それが、あつと思う間もなく大きな滴の塊に膨れあがると、滝が落差のある壁を落ちるように、ふつくらとした頬の上を滑り落ちた。彼女はそれを拭おうともせず、隠そうともしないで達郎を睨みつけた。達郎は、声を上げることも出来ず、あわてて目をそらした。

三

「もう私も年だから、何時死ぬかもしれない。達郎がお父さんの味方をするのは、それはそれで私は責めることはしません。しかし、達郎にも憶えておいて欲しいと思うから、この際だから言っておきますがね。お母さんはお前を生んで、産褥熱に罹って死んだの」

富美子は達郎を睨みつけたままである。それは達郎も知っている。達郎は黙っていた。

「お父さんはその時、充分看病してくれただろうか。私は、そうではなかったと思うの。そりや働きに出なければならぬから、ある程度やむを得ないのかも知れないけど、お母さんはどんな病が重くなつて、二ヶ月後には廃人のようになって死んだの。体は動かない。全て垂れ流して、ぐちよぐちよの中で転がっていたの。八歳の私も利枝子も、お母さんにしがみつくだけで何も出来なかつたんです。お母さんは気狂いのようになって、いや、完全に呆けて、何を掴もうとしたのか、私たちを探そうとしたんだろうと思う。一生懸命手で空をかき回してうわ言を言いながら死んで行つたの。私たちはその手を、ずっと握っていたの」

富美子の目はもう乾いていた。

「それが数年たつて、私たちが高等科を卒業すると、どうだろう、今度はお父さんは私たち二人を、さつさと家から追い出してください。私たちはもつと上の学校に行かして下さいと何度もお願いしたの。でもそれも聞いてくれなかつたでしょう」

これも達郎は、何度か聞いて知っている。

二人は年頃になると、急くように嫁に出された。幸い二人は十人並の器量であつたし、二人共に学校の成績も良く近所の評判も良かったので、周囲から何時とはなしに話が持ち込まれて、父は苦勞はしなかつたらしかった。

そして、二人がその話に簡単に同意しなかつたのは、同時に、父に後妻の話が進んでいるのを知っていたからだ。

母を想っていた姉妹は、後妻を迎えることに反対した。学校を出てすぐ、近くの事業所に勤めて収入は家に入れていたし、家事も自分たちが頑張つてやっていたから、急いで妻を迎える必要はないはずであつた。母想いだけで生きてきた娘たちは、母の面影が残っている家から離れるのは、何時かはあるだろうと考えていても、今は、その刻ではなかつた。そして後妻は、間違いく家のそこに残っている母の面影を消し去ってしまうはずである。それが彼女たちには、また辛いことであつた。その時、彼女たちが、男性の肉の欲望にほんの少しも配慮が行かなくなつても責めることは出来ない。

当然、家の中は諍いが続いた。父は嫌がる娘を強引に見合いをさせ、有無を言わず結婚させた。富美子は十八歳になった春に、家を出され、利枝子はその翌年である。

父は、年頃を迎えた娘を外に出すのは当然のことで、さつさと相手を見つけてきて、良縁を結んだのだと言った。しかし、二人は、父は自分の都合を優先して、自分たちを邪魔者扱いして、体よく放り出したのだと理解した。

「私はね、はつきり言えば、お父さんなんかどうでも良いの。お母さんが死んでから、私たちはお母さんにすがって生きてきたの。嫁に出されてからもそれは変わらないの。多分利枝子もそうだと思うけど、嫁に行つて、お線香を上げる時、これはお母さんの分として、姑に見られないようにして、余計にあげていたの。お父さんは、お母さんを死なせておいて、今度はさつと自分の都合だけで私たちを外に追い出したの。お父さんに今更恨み言を言うつもりはないけど、その時以来の諸々のことが、やはりこの身体の中に残っているの。そして、この手が、まだお母さんを覚えているの。私がこうして来るのは、達郎、お前が一生懸命やっているから、それは付き合つてやらなければならぬと考えているだけですよ」

「私もそうだよ」

利枝子が頷いた。

「それだけではないの」

富美子は言った。

「お父さんは、お母さんを愛していただろうか？ 私はそれが一番許せないの。私が生まれたのが、十二月の二十五日、お母さんが入籍したのが、その五日前の二十日。お母さんは大きなおなかを抱えて、お父さんのところに転がり込んできたのだらうと思うの。先方は堅実な家であつたから実家から追い出されたのだと思う。一緒に住んでいて、それまで入籍しなかつただけというのは考えられない。可哀想だと思わない？」

自分たちが家から放逐された時をそれに重ねたのか、二人の姉はしんみりとなつた。

達郎は溜息を一つ吐いただけで黙っていた。沈黙は金、を考えたわけではない。達郎自身は、姉たちとは違つて中学を出るとすぐに都会の全寮制の高校に入った。姉たちと達郎の扱いは、天と地ほどの差があるのは、あまりにも明白すぎて比較するべくもなかつたから、何一つ口に出すことが出来なかつた。

父の臨終が、心の中に押さえつけてきたわだかまりを、今後は、相手のいないまま自分たちに残されるのを、どう考えたら良いのか、様々に思いが錯綜して、今、目の前の達郎が父に加担するのに爆発したのである。

しかし、二人がこんなに怒りをあらわにして、母のことを話すのは初めてのことであつた。達郎は、ただただ聞いているだけ、が精一杯であつた。

四

富美子が、これだけは許せないと口にした話で、達郎を驚かせたのがもう一つあつた。今、東京都下にある墓石に刻まれた戒名の順序が逆になっている、と富美子は言った。

「達郎、お前、墓参に行つていないでしょう。有難うね。それに気がつかなくつた？」

これは初耳であった。今まで何度か御参りはしているが、戒名の順逆は、一度も考えたこともなかった。それに気がついていなくなつたのかと問われれば、返す言葉がない。これは達郎の大失態である。どえらいことになってしまった。達郎の背中に冷たいものが走った。

「気がつかなくなつたなあ」

達郎は、身体を小さくした。

富美子は、今は完全に落着いていた。彼女は頬に涙の痕跡を残したまま、上目遣いに達郎の機嫌を取るように見て言った。せつかくの姉弟の顔合わせを不愉快にしまつていゝのを気にしているようであった。

「いや、お前を責めるわけじゃないよ。だけど、酷いじゃない。こんなことつてある？ まあこの際、お前に誤解されるのも嫌だから、もう一つ教えて置くからね。達郎はどう考えるか分からないけど」

達郎は、年に少なくとも三回は墓参をしている。都下の一角に深い山の裾を切り開いて広大な公園墓地が整備されていた。整地された各々の区画の隅に水場が設けられている。墓参のたびに墓石も洗ってくるのを常としているが、背後に回つて墓石をタオルで拭くことはあつても、迂闊なことに石に刻まれた文字を一度も読んだ事はなかつた。

墓は達郎の家から往復二時間半である。一人で行くのは退屈であつた。それに折角それだけの時間をかけて墓参だけで終わるのは勿体ないから、帰りは何処かで一杯やる約束をして、般若心経を空で読誦出来る友人を同道した。その友人とは、月に一度、酒を酌み交わして、長いお喋りをする同年の親密な関係である。

最初、彼は全くの他人の墓に坊主でもないのに御参りするのはどうかと疑問を呈したが、無縁の人に御参りを受けるのは至上の悦びであるし、ちょっと毛色の変つたハイキングだと考えることにしてくれと説明をした。

花を飾り、線香を上げ、般若心経を読経して、その後は、やはり都会のそれとははつきりと一線を画している新鮮な空気を腹に一杯詰め込む。ベンチに座つて弁当を広げながら、周囲の緑なす山の斜面に山桜の白っぽい塊があちこちに浮かんでいたり、山藤の紫などの色がその季節によつて異なるのに目をやる。頭上の蒼穹には白い雲が浮かんでいる。その後は、バス通りに出て、時にはそのまま近場の山の中のさびた温泉まで足を伸ばして身体を休めたりした。あとはその時の気分によつて、周辺の料理屋に上がるか、都会の盛り場まで一気に戻つて一杯やりながらお喋りをしているという、かなり良い加減な墓参で義務を果たしている。

「いや、今度行つたら、きちんと見てみるよ」

達郎は首をすくめて言った。

「お父さんの納骨の時に、分かるわよ」

利枝子が憎らしそうに言った。

墓はそれまで先祖の地の東北にあつたが、東京に移すということになつたのはもう十年も以前のことである。父は自分の死後の準備を整えたのである。その改葬の際、新造した墓石に、当然の如く祖父母の戒名を刻んだが、その時、どうしたことか実母の戒名を刻まなかつた。ただ忘れたのか、意図的なものがあつたのか分からない。そして、その後、後妻が亡くなつた時、戒名を刻む機会が訪れたが、その時も母の戒名を刻まなかつたのである。

それが判つたというのも、ある時、新しい墓が出来たと聞いた富美子が、東京に出た折に、父のところには寄らずに御参りをした。

富美子と利枝子は、母と逢えるような気持ちでいそいそと出かけた。自然の真つ只中の景観の良い静かな処だと聞いていたから、どんな場所でもどんな墓が出来たのだろう、母はようやく落着く場所が出来たのだと、二人は嬉しかった。

夏の暑い日であった。駅前で仏花を購った。線香などは家から用意してきた。駅から近いと言つても女の足では三十分もかかるからバスに乗った。周囲は緑が多く窓を透しても環境の良いいことが理解が出来た。心は弾んでいた。

ところが二人は、その直後に冷水をいきなり頭から浴びたのである。うきうきとして墓石の後ろに回つてみると、二人が目にしたのは、祖父母の戒名と後妻の戒名があるだけで、母の戒名は刻印されていなかった。

最初、二人は同名の他人の墓の前にはないかと思った。慌ててバツグの中からもう一度メモを引っ張り出して、区画と整理番号を確認したが、数字は間違いなく合致していた。墓石の色も教えられた通りで、祖父母の戒名も記憶にあるとおりでである。

どういうこと？

青天の霹靂どころではなかった。霹靂なら、身を避けることも出来るだろう。しかし、今眼前にあるのは……。

もう墓参どころではなかった。

二人は驚きを通り越して、身体の中で起つている自分でも制御出来ない震えに全身をおのかせて、真つ青の顔を見合わせた。芝生の上に倒れこむように座ると、暫く身動きも出来ず茫然と座しているのが精一杯であった。

この時、母の戒名がきちんと刻まれていたら、二人の姉は、その時の嬉しさを胸に抱いて、今までの父との確執を忘却することが出来たかもしれない。無上の喜びを得た時、それを代価としてそれまで積層した不満や憂苦の一切を滅却する作用を与えることは誰しもが経験することである。

ところが事實は、全くその逆であった。嬉しさに弾んで怒りを鎮めてきた二人の姉は、もう不満も不服も怒りも恨みも感じなかった。二人の衝撃はあまりにも大きかった。二人はもう救いようがないほど意気消沈して、完全に父親を自分たちとは相容れない異質の人間として目の敵にすることになった。二人は、帰りの電車の中でも、黙りこくっていた。

これには、色々なことが考えられた。

父は後妻に気を遣つて、それまで実母の戒名を彫るのを遠慮していた、というのもおかしい話だが、二人はそう考えた。しかし、そうだとすると、後妻の死はその束縛から開放されたのである。それならその際、一緒に、没年通り順序正しく刻印すべきであった。が、それをしなかったのである。

富美子の抗議で、父はすぐに母の戒名を刻んだ。父は、ただ忘れていただけだと釈明した。忘れて良いことと悪い事がある、と富美子は抗議した。が、順逆を直すこと、つまり墓石を作り直すことは、父はしなかった。今その過ちは、注意して年次を追つて見る者の目には隠すことが出来ない。何度見直してみても、後妻の戒名の後に、五十数年以前に亡くなった母親の名が

刻まれているのである。

「可哀そうにねえ。達郎も気がついていなかったの？　言わなかったからねえ」

富美子は、半分べそをかいいて達郎を覗いた。達郎は返事が出来なかった。

「これは達郎には言わないで置こうと、その時話し合ったの」

利枝子が言った。

「お父さんは本当に忘れていたのか、故意にやったのかねえ」

富美子が沈んだ声で言うと、

「忘れていたにしても酷いし、故意にやったとしたら、もう何をか言わんやじゃない」

利枝子が、目を鋭くさせて、

「未だ、他にも一杯言う事があるじゃない」

と、この際、達郎に言っておいた方が良いというように口を挟んだ。

「そりやありますよ。言い出したら一杯あって切りがないくらい。でももう止しましょう。達郎を困らせるだけなもの。それに今更、お父さんを責める心算はないの。しかし、こういう事を少なくとも私たちがきちんと憶えていないとお母さんは可哀相。もう死んでしまつてから、お母さんを大事にすると言つてもどうにもならないけどね」

こらえ切れずにか、二人の姉の目に、また涙が滲んでいた。そして、自分たちの思いを達郎が正當に理解してくれるのを懇願するように、達郎をじっと見た。

「分かった」

と達郎は言った。それが随分威張った言い方になった。が、威張つて言つたわけではない。達郎にしても、胸腔が詰まつて制御出来なかつたのである。

達郎ははつとした。いや三人が、はつとして、顔を見合わせたか、二人はそのことに気がつかなくつたように何も言わなかつた。

五

達郎はしかし、姉たちに主張したほど、自分の判断に確信があつたわけではなかつた。迷いは大いにあつた。事があれば、携帯電話に連絡して貰うことにしたが、途中で引き返すことは愚かであつた。行くのか行かないのか、達郎は頭の中で何度も行きつ戻りつしながら、老人の日常をなぞつていた。

今まで達郎は、老人の家には新年と春夏秋冬の四度は顔を出していた。しかし、何時も時期を決めて計画的に訪問したのではなく、ある時、休みで家に呆としている時など、ふと気がついて、翌週の日曜日などに時間をうかせて、ほんの二時間ほど、茶を飲みながら過ごしただけである。老人宅にいた時間は、往復の交通に費やした時間よりも短かつた。

その時目にした老人は、動作は緩慢でも頑固に一人で何でもしていた。呆けた表情に年老いたという感慨はあつたが、老人は達郎の顔を見ると、もうどんなことをしても大きく動くことはない顔の皮膚に精一杯笑顔を浮かべて、来客のために買った物だと言つてビールを出した。それから、ゆつくりと操り人形のようにぎくしゃくとした動作で、台所から缶詰と袋のつまみを持ち出してきた。これは、老人の備蓄用のものに違ひなかつた。その時達郎は畳の上で長々

と横になっただけで、ここに来る時に用意してこなかったことを後悔した。いや失念していたわけではなく、元々酒量の行かない達郎は、老人を前にして一人で飲むつもりはなかったのである。だから、電車を降りた時、頭の中には残っていたのだが、何時も小さな茶菓子だけを手にして、ビールは持参しなかった。喉の渇きと口を滑らかにするのはお茶で充分である。帰ってからゆっくり飲むから心配しないで良いよ、と出されたビールに手をつけずにいると、老人は不満顔をしていた。仕方なく、それでは、と口にしてはいる達郎の姿を見て、もともと寡黙な老人は機嫌が良かった。

話題も老人相手に政治や経済、それに会社のことなどの話が出来るわけでもない。自分の家庭も、幸い皆元気にしているし、口には出さないが、どうやら噂を聞きたいような富美子や利枝子の事も、それからその孫たちのことも、お蔭様で全員息災にしているという話が終われば、あとは手持無沙汰になった。だから、老人の顔を見に行くのは、必要でありながら、ちょっと気詰まりな時間でもあった。

しかし、そんな時、老人の身边に「死」を感じたことは一度もなかった。老人の意志の強さが、年令によつて退化しようとするものを押しとどめて、明るい陽光の光の中の力強いものを、自分の味方に引き寄せているようであった。それが一月前、突然電話が来た時は吃驚した。

急いで駆けつけて医者に会うと、

「時折、見に来ないと駄目ですね」

医者は、やんわりと達郎を詰った。

「年寄りには、こきつと行くと、それでお終いになることが多いですよ。今回は年も年ですから難しいです」

医者はそう言つて口をつぐんだ。

しかし、達郎は、今日も「死」は感じなかった。が老人の残りの刻が、今度ばかりは、空になったビンの底の一滴ほどにしか残っていないことは明らかであった。

「桜を観に行つてくるよ。友人たちとも久しぶりに会いたいし、今ちょうど良い時期にぶつつかっているんだよ」

達郎は病人の顔を見ながら、胸の中でつぶやいた。

老人の家のすぐ近くの小さな公園に、時期になると、数本の染井吉野の大樹が白っぽい大きな塊を作つて咲き誇っている。昨春訪問した時は花の時期は終わっていた。今年は、時期が少し早すぎた。桜の咲くのを見に行くわけではないが、周囲の景色の移り変わりで、何時、老人を訪問したのかが分かる。

「もうあと一週間かな」

老人は、残念そうに言った。

「咲くとすぐ散つてしまうのにな」

そんな話題になつたのも、その時、点けていたテレビが、ちょうど京都の各地の桜の状況を報じていたからである。古い小型のテレビは殆んど褪色もなく、平安神宮、仁和寺、円山公園など名所の桜が映し出していた。親子は二人とも京都には何度も行つたことがあるが、桜の時期に訪問したことはなかった。

「来年は行つてみようかなあ。一緒に行く？」

行ける筈がないことは分かっている。

「行ってきたら良いじゃないか」

老人はちよつと口元を緩めて首を横に振った。確かに老人の状態では、もう出歩けるはずもなかった。

三寒四温を続けていた気候が一気に緩んで、今、洛中洛外は桜花の中に埋もれているとテレビが報じていた。チャンネルを回すと、何処のテレビ局も競うようにそれぞれ思うところの名所の紹介をしていた。

夜桜の白く朦朧とした大きな塊が、漆黒の闇の中に凜と佇立していて照明の光を浴びてはらはらと風のせいでもなく花片を散らしている姿は、絢爛で妖艶で清楚でさえあった。日程も、ずどんと当たっていた。そのあまりの的中に、学友連中は、今まさに花の海に舟を漕ぎ出していくような陶酔を味わっている。桜に酒肴がついていれば、父と別れの宴をすることに不足はなかった。

しかし、事は理解を超えている。それは時に委ねるより他になった。

「高木は時期を読むのが旨いね」

勿論、これで幹事を又続けさせる魂胆である。偶然、ずばりと当たっただけのことだが、それでも、どうだとばかりに鼻をうごめかして自慢するのも酒の肴であった。

しかし不意の事態が、宴会の最中にぶつかるとはあり得た。その場合は飛んで帰ったとしても、親不孝と誇られることは間違いない。「賭けね」という利枝子の言葉は達郎の胸の底に重く暗く沈んでいた。

六

翌日朝、達郎は予定通り自宅を出た。玄関の敷居をまたぐ時、途中で帰ってくることになるかもしれないことが頭を掠めた。それから又すぐに、そんなことにはならないだろうと考えた。

昨夜、病人は静かに眠っていた。傍に付き添っている達郎の呼気が、時折り尻の位置をずらす椅子の堅い重い音と共に、寂として音のない部屋の中で大きな異音のように耳に響いた。それでも眼前の薄い掛け物は、ぴくりとも動かなかった。掛け物の下にあるものは、既に生の意識を失って固形化した骸を感じさせた。その時の不安と安心が、予想される様々な事態を想像させた。

新幹線の座席に座っている間、達郎は網棚の手荷物を何度も見上げた。連絡があった時、手荷物を素早く取っても何の意味もなかった。が、そうと分かっている、その時の順序が頭を離れなかった。

手荷物を手に取る、それから例えば隣に座っている菊川に、自分に急用が出来て、次の停車駅から皆と離れなければならない事情を伝える。引き返すことになるのなら、現地に到着してからよりも、車中の方が行動が取り易かった。

窓の外の目の先の家々や畑や林が、飛ぶように後方に滑って行った。目を外にぼんやり投げていると、達郎の脳裏に、二人の姉の姿があった。父の姿ではなかった。

おかしいこと、と思ひ出してみると、二人の姉の姿は、もつと以前から自分の脳裏に浮かんでいたことに気がついた。

その時達郎は、不意に、父の死と共に、父と二人の姉の争いは終わる。が、うつかりすると、それは新しく、達郎と二人の姉との断絶を生むおそれがあるのに気がついた。つまり、自分が考えるべきは、父のことではなく、二人の姉のことを考えなければならないということである。この発見は達郎に衝撃を与えた。

達郎に母の記憶はなかった。母が産褥熱で二ヶ月後に亡くなった事は、小さい頃に聞いている。しかし、それだけである。

当時、世上一般の公衆衛生状態を考えれば、産褥熱の罹患率は高かった。助産院で行う産前産後の衛生管理は決して安心出来るものとはいえなかった。罹患して後の処理と、その後の治療も不十分不完全なものであったとすれば、それは父だけの責任として負わせるのは酷である。

しかし、姉たちが考えているのは、その時、父が母に献身的な看護をしてくれたかどうか、ということである。いや、父は母に愛情を持っていなかったのだという疑問であった。それは諸々の事情を考慮しても、否定的な疑問を彼女たちに抱かせたのである。

母が大きなお腹を抱えて、師走に実家を追われて父のところに駆け込んで来たのだ、と考えたのは長姉の作り話ではない。姉は自分の婚姻の際に、膳本を見て初めて、その月日の異常に気がついた。母は大きなお腹を抱えて、父のところに逃げ込んできた。父はそれを嫌々受け容れたのだろうか？ とすると、自分は母のお腹の中にいた時から母を苦しめていたことになる。長姉は繰り返して、そう思わずにはいられなかった。その悲しみの上に、父の母への愛情のないことを如実に証明するように、今度は、自分たちが父から追われたのである。

その父が、また、後妻の機嫌をとって、実母の戒名も刻印しなかったのだと考えるのは辛いことであつた。しかし、それも相手のことを考えれば、やむを得ないと譲歩して理解した。しかし、後妻の死の際に、後妻の戒名と同時に、没年通り母の戒名も一緒に刻印することが出来たはずである。それは忘れていたのではなく、父の意識の中から完全に外れていた結果である。そうとしか考えられないとしたら、二人の姉妹は、父に反抗する以外に、自分たちを律することが出来ない。

富美子は、その上、まだ八歳にしかならないのに、母親の死の原因になった新生児達郎の面倒を見た。勿論、達郎にその記憶はない。

達郎に残っている記憶は、ずっと下つて、二人の姉が家を出されて以後のことである。

ある夏の日、小学生の頃、独りでぼんやりと家の縁側で足を投げ出していると、長姉が物陰からこっそりと、まるで泥棒が家の中を探るような中腰の姿で入って来た。

家には誰もいなかった。婚家は歩いて十分ほどである。富美子は、達郎を認めると、安心したように近寄ってきて、医者が患者を診るように、目、鼻、口、額、頬と順番にしげしげと見た。

「元気になっているかい？」

優しい声であつた。

「うん」

「何も変わったことない？」

「ないよ」

達郎は暢気に答えた。姉は安心した顔を見せた。が、それでも何かを探すように達郎の顔をしげしげと見て、

「何かあったら知らせるんだよ」

「うん」

そう答えたのを記憶しているのは、何でそんなことを訊くのだろうと、その時、不思議に思った覚えがあるからだ。しかしその時、それ以上のことを考える賢さと知識はなかった。富美子は、自分の姿を見られるのを怖れるように周囲をぐるりと警戒するように見回すと、

「じゃ、また来るからね。元気にしているんだよ」

そう言つて去つた後姿が淋しかった。

小さな家がひしめくように並んで、前にも後ろにも、何処も出入り自由なように玄関の戸は開いていた。姉の姿は周囲の目からは、多分逃れる事は出来なかつただろう。だから富美子が時折実家を覗いているということは、後妻のたきの耳にも入っていたはずである。たきは、二人の姉が自分に反感を抱いていることを知っていた。幸い、たきは達郎には親切であつた。達郎は、不自由、不満は一度も感じたことはなかつた。たきに責任はない。

そして達郎は中学を卒業すると、その地を離れて都会の全寮制の高校に通うことになった。家との接触は薄くなった。正月や夏の休暇に家に帰ると、やはり、富美子は、こっそりと達郎の顔を見に来た。

「達郎は何も知らないからよ。何をとんでもないことを言っているの」

富美子の声が耳元に聞こえた。

達郎の身体の中にさざ波が起つた。不意に達郎の心の中に転がり落ちた小さな石は、二人の姉と父との葛藤の水面に大きな波紋を起こして、電車の振動に助長されるように達郎の中に広がつた。

達郎は溜息をついた。

二人の姉が、長年母への愛情と乾く事のない悲しみを胸に抱いて生きてきたのは、家を追われた自分たちが、母港のない流浪の毎日を過ごす中で必要であつたからだ。母を想うことが二人の生きる力の源泉であつた。共に生きるべき時を生きることが出来なかつた母親と生き続けることの出来る唯一の方法が、母を想うことであつた。母が受けた不幸と苦しみを、自分たちも分かち合おうと考えると、心が落着いた。そして、家を放逐された二人にとって、それを繋ぐのは、達郎しかいないのである。達郎は愕然とした。

七

時は何事もなく過ぎて行つた。

京都駅についたが、連絡はなかつた。しかし、それで事は安定しているとは言えない。

不安は、最初の嵐山から嵯峨野周辺を回っている間も、達郎の胸の底に沈んでいた。

桜花はそれぞれの土地で、案内人の流暢な説明と最大限の褒め言葉を自ら演じるように、芳醇で絢爛に咲き誇つて、数多の散策者の目と希望を満たしていた。

達郎は、これまで桜の花を一度も目にしたことがないかのように眺めた。桜を眺めている自分の眼が、そのまま老人の目に繋がっていると思うと、桜花と老人が臙に重なって瞼の奥に映った。

夕方宿に入った時、達郎の不安は殆ど薄らいでいた。

ここまでの行程を終われば、今この場に緊急の連絡が入っても、グループから簡単に離脱できる。

湯に浸かり夕餉の宴が始まった。達郎の不安は、一層薄らいで行った。もうこの時間となつては、今この場で、ここを去ることになつても満足であつた。それに周囲に迷惑をかけることもなかった。しかし、芸妓が入り宴たけなわになつても、達郎の脳裏の底には老人の姿が一時も消えたことはなかった。それが、目前の会話や享楽から離れて、時折達郎をぼんやりとさせていたのは、致し方のないことであつた。その変調に気がついたのは、月に一度は会社の帰りに時間を待ち合わせて、酒を酌み交わしている菊川である。

芸妓が帰つてふつと落ち着いた席で達郎が愉しんでいないことを、隣の菊川がとがめた。

「どうした？ 何かぼんやりしているじゃないか。身体の具合でも悪いのか？」

「いや、何でもないよ」

「顔色が良くないぞ。予算が超過するのなら、皆から出させれば良いのだよ」

「そんなことは心配してないよ。皆年を取つたせいかな飲兵衛が少なくなつたようだな。予算は充分足りるよ」

が、その時達郎は、もう連絡が来ることはないという安心感と陽気な酒の穏やかな酔いで、菊川にだけは、今まで自分の頭の底にあつて一時も去らなかつたものを、話しても良いような気分になつた。

そしてそれは、未だ有り得ることである。それなら、やはり彼にだけは内緒の話として通じておいた方が、その時の時間のやりくりを簡略に出来て良いかも知れない、と緊張感を弛緩させた達郎は、つい思つた。

「親父がね、今入院中なんだよ」

「何の病気？」

「いやもう年だね」

「幾つ？」

「九十になつたよ」

「それは文句ないよ」

「うん文句ない。それで俺は勝手なことを考えていてね。今こうして皆さんと一緒に酒を飲んでいて、ついだに親父と花見をして一杯やっているつもりでいるんだよ」

「それはいいや。親父さんは飲めるのかい？」

彼の父は昨年亡くなっている。菊川は、羨ましそうな顔をした。

「いや、もう飲めやしないよ。俺が飲んでいるのを黙って見ているだけだよ」

「そうか」

菊川はそう言うと、何を思ったか、発言の時に手を挙げて指名を求めるように、いきなり手を高く上げて、満座に声をかけた。

「ちよつと皆さん、聞いてくれないか。これから夜桜を見に行くが、その前に改めて乾杯をしたいのだよ。今、聞いたのだが、高木のおやじさんが病気で臥せっているんだそうだ。それで高木は親父と一杯やつているつもりをしているんだ。我々も、その親父さんと乾杯をしようと思うんだが」

「誰とでも乾杯するぞ」

「よし、乾杯だ」

その時、座の中の二人が立ち上がった。何をするのかと呆気に取られている顔の中を、二人は床の間に近寄ると、親指ほどの太さの桜の枝を四、五本頃合いに断ち切つて豪快に投げ入れてある、これも多彩な色調に作られた大垂を、よつこらしよと両方から抱え上げて、座敷の中央に移した。あらかた涉猟し尽くされた食膳に囲まれた中央の台の上で、桜木は鳳のように左右に大きく枝を拡げて、薄い紅を刷いた白い芳醇で大きな房々が鳳の羽根を飾つて、今が盛り刻を主張するように力強く生気を発散させていた。

「それじゃ、親父さんに乾杯」

「健康に乾杯」

「皆に乾杯」

「有難う。嬉しいね。こんな話をするつもりはなかったのだが。感謝するよ」

「ところで高木、親父さんはどんな親父さんだったかね？」

一人がひょうきんに赤い顔を突き出して、機嫌の良い大声を出した。

「どんな、と言つてもなあ。普通だよ」

「そりや普通に決まつているさ。ついでに思い出を一つ語れよ。それでもう一回乾杯だ」

皆の顔が達郎に向いた。それを聞くのも悪くない余興だという、興味津々の顔が並んでいた。

達郎は慌てた。こんなことは予想もしていなかったことである。そして、こうした時には適切な事柄が浮かんでこないと言うのも自然の摂理である。

周囲は達郎の顔を、ほら、早く言わんか、と言うように、にやにやしながら眺めている。

もう逃げる事は出来なかった。何か言わなければ沽券にもかかわると切迫感を覚えた時、達郎が小学生になつても寝小便をしていたという、あまり誉められない事柄が、ひよいと浮かんで来た。

達郎は、また慌ててしまった。急いでそれを放り出して、何か他に気の利いたものがないかと探した。が、慌てれば慌てるほど脳裏に浮かんだ状景は、逆に一気に膨潤して、しかも鮮明になるだけである。皆の戯れ顔を見無視することは困難であった。えい、ままよ、と達郎は従つた。

「それじゃ、まあ、酒の肴の話として、ご愛嬌に聞いてちょうだい。今思い出してしまったので、その話をします」

席を面白くすることも必要であった。

「恥ずかしながら、俺は子供の頃、寝小便が直らないで、七、八歳の頃までしていてね」

「おー」

「ひゃー」

頓狂で大仰な声があがり、頬のゆるんだ顔が並んでいた。

「ある時目を覚ますと、身体の下がぐっしり濡れていた。腰の下に手を入れると、絞れるほどに濡れていて、何時ものように体温で乾かすことはとても不可能であった。布団の中でぐづぐづしている」と、親父がどうしたのか、と枕元に来た」

「叱らないから理由を言ってみろ」

達郎はしぶしぶ布団の中から、父親を見上げて言った。

「白い蝶々を追っかけていた」

「それで」

「蝶々が逃げるので、おしっこをかけながら追っかけていった」

「で、蝶々にかかったのか？」

「いや、かからなかった」

「うん。それで？」

「かけながら走った」

「何処を走っていたんだ？」

「川の土手の上」

「蝶々はどうした？」

「逃げていった」

「それじゃ、もう起きて布団を干さなきゃならないな」

親父は笑い顔で言った。

「小言はなかったよ」

「なあんだ。高木は行儀が良くて、そんなことはしていないような顔をしていたが、やっぱりやっていたんだな」

どつと笑い声が起った。

「やさしい親父さんだね」

「いや、甘い親父さんだよ」

「それじゃ、もう一度、乾杯」

全員の声で、グラスが上がった。

「さあ、これから夜桜を見に行こう」

「高木、お土産を忘れるなよ」

誰かが言った。

どやどやと、皆が立ち上がった。桜花の壺はそのままに置かれた。畳の上に、数片の花びらがこぼれていた。その時、達郎はヒントを貰ったような気がした。花を父に持って帰ろうと思った。

八

翌日午後、達郎は東京駅で仲間と別れると、そのまま真っ直ぐに病院に向かった。陽はまだ高く頭上に輝いていた。今まで何の連絡もなかったことから、老人の身に重大な変化が起らなかったであろうことは疑いがなかったが、老人が今どんな状態にあるのか、は達郎を不安にさせていた。

達郎は病室に入ると、逸るように顔を近づけて老人の表情を仔細に見た。老人は静かに眠っていた。あまりにも静かすぎて、一昨日夜、行くか止めるかと不安に惑いながらつぶさに顔を眺めた時の状態と、どのような相違があるのか見当もつかなかった。ただ、これで姉たちから小言を言われなくて済んだ安堵が胸に広がっていた。

看護師が姿を見せた。ちょうど回診の時間に当たっていたのか、それとも随時回診の対象になつていて、繁く病室を覗いていたに違いなかった。目が合ったが、軽く会釈をただけで看護師は自分の仕事に従事した。

彼女は上掛けの下から老人の腕を取り出し、注意深く脈を測り、小首をかしげ、そして何かの音を聞いたのか、頷きながら付添人を見た。その時、彼女の眉が少し曇った。達郎は、はつとした。彼女が何か言うのかと思つたが、腕を元に戻すと、何事もなかったように部屋を出て行つた。達郎は一礼しただけで声をかけなかった。

彼女が眉を曇らせたのが気がかりであつた。看護師の足音が廊下から消えると、老人の傍に寄り、上掛けの端をそつとめくつた。腕は今彼女が戻したままにあつた。皮膚がそげて枯れ枝のようになった腕と五本の指が、何かを掴もうとでもするかのよう開いていた。

達郎は、その腕を少し横にずらして上掛けから手首だけを外に出した。乾いて艶のない手首は、白い敷布の上にもるで堅い塑像のように置かれた。指に触れると、あるかなきかの温もりの中に、小さなしかし鋭い冷気が、病人の身体が刻々に移ろっているのを伝えた。看護師はこの中に、何かの兆候を見たのに違いなかった。

達郎は、鞆の中から、昨夜公園から袋に入れて持ち帰った八重桜を取り出した。湿りを含ませて、周りの荷物に押されても潰れないようにと注意して持ち帰つた桜花は、枝に己を繋いでいた時と同じに、みずみずしい生氣と色香を保っていた。

達郎は一房を摘み上げると、塑型のように固まった病人のぎこちなく開いている掌の中に置いた。紅色の大ぶりの桜花は今正に裸地に落花したように掌の中に収まって、落魄の老人に伴うように見えた。

それからあとは、ゆつくりとまるでケルンを積むように一つ一つを静かに病人の掌の上に重ねた。桜花は老人の開いている掌に溢れて、照度を落として淡い光に包まれた病室の中で、そこだけ豊穡で優雅な春の華やぎを感じさせた。

親父は待つていた。別れを告げる相手が自分の傍に戻つて来るのを、耐えて待つていたに違いないと達郎は思った。達郎は、桜花をお土産に持ち帰つたことに、少し誇らしい気持ちにもなった。老人は、その桜花が掌中にあることを喜んで感じ取っているに違いないと思った。そして、こんな華やかな送り方が出来たことに満足を覚えた。

一時間ほど後、姉たちが姿を見せた。達郎は入口のホールで二人を待つていた。二人は達郎の姿を見ると、目で、老人の状態はどうかというように訊いた。笑みを返すと、不安に緊張した表情が嬉しそうに緩んだ。

「本当に達郎もなかなか危ない橋を渡るんだねえ。家でお喋りをしていても、落着かなかつたわ。でも良かった。何事もなくて」

「姉ちゃんは、どうだろうか、どうだろうかつて、まあ落着かないこと。達郎に任せているんだと言つていながら、そわそわとしているんだから」

利枝子が冷やかすように言った。

「うん、親父もさつさと逝ったら、何を言われるのか分からんから頑張ったのさ」

達郎は自慢顔をした。今だから、不安もなく陽気に口に出来た。何事もなく事が済んだ安堵で、三人は上機嫌で笑いながら軽口をたたいた。

しかし、その上機嫌は、その直後、病室に入った途端に一変したのは、達郎の全くの計算違いであった。

長姉は、中を覗くように首を伸ばして病室に入った途端、老人の掌の中にある桜花に目を止めて一瞬に顔を曇らせると、

「この花は達郎が持ってきたの？」

と非難の顔を達郎に向けた。達郎は予期しなかった反応に吃驚して、返事が出来なかった。

「お前は、やはりお父さんを大事にしているんだねえ」

長姉の低く呻くような声は、達郎に、姉たちの悲哀の錯綜した気持ちをつつかり失念していた不注意を思い出させた。達郎は、ただ桜花の華やかさを別れ花の一つとしたつもりで、しかも、姉も感心してくれるだろうと考えていたが、姉の沈んだ目に慌てて、機嫌をとるように言訳をした。

「いや、そうじゃないよ。せつかく見に行つたのだから、花を土産にしただけだよ」

二人は、ふん、と鼻をつり上げた。

「お父さんは良き理解者があって良かったわねえ。お母さんにもそういう人がいたらね。私たちは小さかったから、お母さんに何も出来なかったし、有難うも言えなかったわ。お母さんにも花を上げたいわね。苦労だけして死んで行つてねえ」

可哀相に、という言葉が出るだろうのを、達郎は慌てて遮った。

「うん、今度墓参に行つた時、豪華なものを持つていくから」

達郎の声は自然小さくなった。姉の怒りは直ぐには溶けそうもなかった。

「豪華なものなんかいらないわよ。忘れないで時折御参りに行つてもらえばそれで良いわ」

「でも、今度行く時つて、その時は、お父さんも一緒じゃない？ それじゃ、お母さんの分と言うことにならないじゃない。お父さんにはいらな。お母さんにだけ上げれば良いのよ」

利枝子が口を尖らせたのを、達郎は笑うわけにはいかなかった。

「そりや、難しいな。どうすれば良いのかな」

「考えてよ」

二人の怒りは、今、達郎に対していた。その怒りを収めなければならなかった。

「じゃ、今度行つた時、般若心経は、母の分二回にするよ」

達郎の声は弱弱しかった。

「お父さんは半分でもいいよ」

利枝子は、まだ怒っていたが、場所が病室であったのが幸いで、それはどこか微温的で達郎への遠慮も籠められていた。長姉が事を収めた。

「もう、良いわよ。これでお父さんもうとう逝つてしまうのだから。どうすると言つたつて、今更どうすることも出来ないでしょう。精一杯、最後のはなむけをして上げたらいいわ。そのうち私もあちらに行つて、お母さんの世話をするわ」

「おいおい、そんなに急ぐなよ」

達郎は困りきっていた。長姉は達郎を無視して、そっぽを向いて言った。

「勿論、ゆつくり行くわよ。お母さんの分まで生きて、そうすると、あちらに行つて話すことが一杯出来るからね」

「そうしないとお母さんが可哀相よ」

「淋しくなるわねえ」

そう言った時、彼女の頭に何が去来しているのか、傍にいる二人には良く理解できた。父が死んで後、暫く日が過ぎて心が僅かにでも落着いた時に、自分たちの中に何時とはなしに侵入してくる寂しさを、今彼女は思い出し出しているように見えた。その時、残るのは想い出だけである。

「私たちが死んだ時は、すべて終わるわよ」

「やっぱりお父さんは幸福よ」

利枝子が、追いかけた。

「うん、でも、もう良いじゃないか。これでお終いだよ」

達郎はしよげた声を出した。

「達郎、私たちにはお終いではないの。それが達郎には分からないのよ」

長姉が諫めるように言った。確かに、二人には、終わりではなかった。三人はすっかり黙り込んでしまった。

その時、三人はお互いの心の中を覗いていた。姉妹は、死に逝く者への愛惜と同時に、決して相容れる事の出来なかつた親しくて疎ましい記憶の取り扱いに戸惑っていた。それはもう解決する道は閉ざされていた。そして達郎は、ただ単に老人の介錯人として、非難を浴びている老人に目をやった。

病室は、四周の壁も、ベッドも敷布も掛け布も、すべてが白一色であった。壁に寄せて病人のベッドがあり、それより少し広い空間があるだけである。その中で、老人の掌の中の紅色桜花だけが、見ようとしなくても目についた。

看護師が、又姿を見せた。

「あらっ、綺麗ねえ。色の良いこと」

看護師が、一瞬戸惑って目を瞠った。

「ええ、綺麗だと思つて持つてきたんです」

「患者さん、嬉しいんじゃないですかね」

看護師はそう言つて、花を掌からこぼさないように、丁寧に扱い作業を終えた。

「どうなんでしょうか？」

達郎は、老人の正確な状態を知りたいと思った。

「ええ、脈は細くなつています。先程は少し音が聞こえましたが、でも今は落着いています」

落ち着いていると言うのは可笑しな言い方であつたが、一時音が高くなつたと言うのは、何を意味するのだろうか。達郎には、それは自分が老人の傍に来たことを知覚したからのように思えた。

看護師は出て行つた。三人には、まだ気まずさが残つていた。それを消すのは達郎の役目であ

る。ここに居ても仕方がなかった。

「珈琲でも飲みに行こうか」

達郎が誘うと、二人は黙って首肯した。

三人は老人を残して病室を出た。エレベーターを降り、長い廊下を亘り玄関に行くまで三人は口を開かなかった。

玄関から外に出ると、蒼天の雲間を離れた落日がちようど目の前、真正面に降りていて、ぎらぎらとした光芒を輝やかしていた。

「随分明るいなあ」

達郎は思わず手をかざした。光芒は指の隙間を透過して三人の顔に当たった。

「このまま、まだ続くのだろうかねえ」

「いや、長くはないだろう。しかし、この光じゃ命を吸い取られそうだな」

問いと答えは、少しずれていた。それが、かえって良かったのかも知れない。

「それで、京都はどうだった？」

利枝子は機嫌を直していた。

「素晴らしかったよ。お土産の花、綺麗だろう？ 俺は、これでも一生懸命考えて持ってきたんだけどなあ」

「そりゃ、花は綺麗よ」

長姉の顔は相変わらず沈んでいた。彼女はまだ少し愚図ついているようであったが、このままでは花の話題が禁句になりそうなので、達郎は思い切って言った。

「どうだい、来年花見に行こうか？」

「達郎のおごりでね」

利枝子が、あっさりと乗って言った。

「それも良いか」

達郎は、真底、それも悪くはないと思った。毎年、花見の時期に、この不機嫌を思い出すのは御免であった。

落日の光芒を背に、三人は珈琲店に入った。話題はもう老人を離れていた。

翌日朝、老人は旅立った。姉妹は、この実に危うい数刻の隘路を無事にくぐり抜けたのは、達郎の感覚が優れていたからだと言った。しかし達郎は、老人がすべて己の最後の刻をきちんと合わせたのだと考えた。